

公教育に数値目標を

鈴木重男さん ◆北海道文教大学准教授

達成の積み重ねが
自信に

盲学校を中心に40年以上、特別支援教育の現場に携わった。障害を持つ子を指導する時に大切なことは、明確な目標を与えること、達成した時にほめることだ。

小さな目標でもいい。だが「一生懸命やったね、よかった」ではだめだ。「5歩歩くとという目標を立て、達成した」という具体性が大切だ。障害を持つ子も、達成

を積み重ねると自信を持つ。それが社会に出て困難に出合った時に負けない強い子を育てる。

困難があっても、教育の手段はある。困難な条件を打破するのが公教育であり、教員に与えられた使命のほうだ。よく家庭の経済力が低いと、学力も低い傾向があると言われる。しかし教員であるなら、学力差を家庭の経済力のせいにしては絶対にいけない。

数値目標を立てて達成することが大事なのは、学校と教員も同じだ。何が足

りないかを分析し、目標に向かって努力し、評価を受ける。民間企業やスポーツ界で当たり前のことが、公教育の学力になるとできない、というのは不思議だ。

「この学校は平均点より低いから、がんばろう」と指導して、教員や子どもはついてくるのか。必要なのは「かけ声」ではない。「この学校は平均点に5点足りない。あと5点伸ばそう」という目標が大事だ。現状を正確に把握せずに、解決の方策が立つはずがない。

評価に必要なのは 情報開示

校長が学校を変えるためには、保護者の力を借りるのが一番だ。私は校長を務めたすべての特別支援学校で、保護者に学校評価のアンケートを実施した。「管理職が教育方針をわかりやすく伝えている」などの質問に「そう思う」から「思わない」まで選択肢を四つ設け、その結果を点数化した。その点数を基に課題を明らかにし、学校改革を実行

した。

「教員は研修などへの参加を保護者に開示していますか」という質問の点数がワースト5に入った時は、教員の長期休業中の研修をチェックし、保護者から開示請求があつても堪える研修に改めさせた。

評価に必要なのはディスクロージャー（情報開示）だ。公教育が税金で成り立つ以上、学校や教員が努力した結果を公開し、保護者や外部の評価を受けるのは当然だ。学力も例外ではない。

「子どもの教育は点数で測れない力が大事だ」という意見もある。その力が本当に大事と思うなら、教員はその力を数値で評価する方法を必死で考えるべきだ。

親孝行な子を認めたいなら、例えばクラスで「今週はお母さんの肩を何回たたきましたか」と質問をすればいい。教員がそうした工夫をせずに「子どもは点数で測れない」と主張するべきではない。



Shigeo Suzuki

江別市出身。1970年北海道教育大札幌分校卒。北海道旭川盲学校長、道立特殊教育センター所長、北海道札幌養護学校長などを歴任し、特別支援教育の充実や改革を進め、2008年退職。北海道高等盲学校にレスリング部を創設し、サッカー-国体成年の部監督を務めるなどスポーツにも造詣が深い。10年から現職。教員研修会である北海道師範塾「教師の道」副塾頭兼事務局長。64歳。